

赤ちゃん絵本 ～乳幼児期の読書の大切さ～

近畿大学通信教育部非常勤講師 河井律子

「赤ちゃんに絵本を読んでやってわかるの？」と思っている人もいらっしゃるのではないのでしょうか。生まれてすぐの赤ちゃんは、ミルクを飲んで、ただ寝ているだけのようですが、実は、生まれたときから、周りのいろいろな刺激と積極的に関わり合いながら、人間として生きていく上で必要な様々な能力を獲得しようとしているのです。赤ちゃんが、言葉を獲得し心を成長させるこの時期に一番大切なことは、周りの大人が直接たくさん話しかけてあげることです。そして、獲得され始めた言葉は、絵本との出会いによって、さらに豊かになります。母親や周りの大人が、赤ちゃんに本を読んであげると、赤ちゃんにとって直接語りかけてもらうことと同じだと言われています。



赤ちゃんに絵本を読んであげると、読み手の顔や口をじっと見つめたり、絵本に手を伸ばしてきたり、にっこり笑ったりと様々な反応を見せてくれます。それを見ると、赤ちゃんが絵本を楽しんでいることが分かります。

赤ちゃんは「絵本を読んでもらう」という心地よい体験を通じて、読み手に信頼感を持つようになります。また、読み手も赤ちゃんの気持ちを感じ取ることができるようになります。絵本を楽しむことで一番素晴らしいことは、互いの心を通い合わせることができるということです。

赤ちゃんが、寝返り、お座り、よちよち歩きと成長していく中で、絵本の楽しみ方も変わってきます。同じ本を何度でも読んでもらいたがったり、知っているものが出てくると、しきりに指さしをしたりその反応も変わってきます。それは、子どもが成長しているからです。だからこそ、乳幼児期には、赤ちゃんに寄り添って、ゆっくり絵本を読み、親子の信頼関係を育てながら、子どもたちが将来、読書に親しむための道筋を作ってあげてほしいと思います。